

社会化における絶対的平等への道

高 澤 勇

目 次

要約

- 1 序論
- 2 相対的不平等の現実と是正について
 - 2・1 相対的不平等の現実について
 - 2・2 相対的不平等の是正について
- 3 相対的不平等の結果と相対的平等について
 - 3・1 相対的不平等がもたらすもの
 - 3・2 相対的平等の可能性について
- 4 絶対的平等への道について
 - 4・1 自我における絶対的不平等について
 - 4・2 絶対的平等の可能性について
 - 4・3 絶対的平等の心境がもたらすもの
- 5 結論

要 約

本稿の目的は、社会化における絶対的平等への道を解明することである。この目的に向かって、まず第2章第1節において、「相対的不平等の現実につい

て」研究した。ここでは、現実社会における相対的不平等の実態について明確にした。¹⁾

次に、第2章第2節においては、「相対的不平等の是正について」研究した。ここでは、ひとは、自分が各種の相対的不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正（相対的平等）を求めらるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正（相対的平等）を求めないであろう。以上のことを明確にした。

その次に、第3章第1節においては、「相対的不平等がもたらすもの」について研究した。ここでは、相対的不平等がもたらす歴史的・社会的問題について明確にした。

次に、第3章第2節においては、「相対的平等の可能性について」研究した。ここでは、相対的平等の可能性がないことを明確にした。

その次に、第4章第1節においては、「自我における絶対的不平等について」研究した。ここでは、自我はその根底から絶対的不平等であることを明確にした。

次に、第4章第2節においては、「絶対的平等の可能性について」研究した。ここでは、人間の無的主体（無的存在）においてのみ絶対的平等が可能であることを明確にした。また、ここでは人間的視点からみた個人の絶対的平等と生物的視点からみた個人の絶対的平等および物質的視点からみた個人の絶対的平等について研究した。具体的に言うと、はじめに、「社会化における人間的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか」という命題を解明した。次に、「社会化における生物的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか」という命題を解明した。そして、最後に、「社会化における物質的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか」という命題を解明した。これらの、本稿の最重要部分にあたる研究の結論は以下のように要約することができる。

社会化における人間的視点や生物的視点および物質的視点からみた個人の絶対的平等は、人間の本来の姿は不生の単種単一の素粒子（または「真空のエネルギー」あるいは「ニュートリノ」等（物理学的見解）²⁾「分割不能の物質」（数学的見解）³⁾「無的主体・存在」（仏教的見解）⁴⁾であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本来の姿は、不生の単種単一の素粒子（分割不能の無的主体・存在）であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であり、それはまた、宇宙のすべての物質の本来の姿と同様である、ということを知れば、すべての人間や生物および物質は不生の単種単一の素粒子（分割不能の無的主体・存在）である点において絶対的に平等であることが理解できるからである。

最後に、第4章第3節においては、「絶対的平等の心境がもたらすもの」について研究した。ここでは、先の第3章第1節の「相対的不平等がもたらすもの」として生じてきた歴史的・社会的問題が、絶対的平等の心境を修得することによって、すべて解消されることを明確にした。

キーワード：社会化、最終目標、分割不能の無的存在、真空のエネルギー、素粒子、絶対的平等、絶対的不平等、相対的平等、相対的不平等

1 序論

先に、わたくしは、拙論「社会化の原動力—体系の大要—」を公表した。（高澤 1997）そこでは、個人はなぜ社会を生み出すのかという主題の解明に主眼をおいた。⁵⁾

次に、わたくしは、拙論「社会化の発展」を公表した。（高澤 1998）ここでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における最初の社会化および社会はいかにして発展するのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁶⁾

その次に、わたくしは、拙論「社会化の最終目標」を公表した。(高澤 2006) そこでは、社会化の原動力によって生み出された、個人における社会化の最終目標は何であるのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁷⁾

この「社会化の最終目標」において到達した結論は次の通りである。

「社会化の最終目標は、真の自己(宗教的自己)を実現して、しかも人間社会で5段階の欲求を充足させて生きてゆくことである。」(高澤 2006: 53)

これに続いて、わたくしは、拙論「社会化の最終目標への道」を公表した。(高澤 2009)

そこでは、社会化の原動力によって生み出され、発展した、個人の社会化の最終目標への道はどのようなものであるのか、という主題の解明に主眼をおいた。⁸⁾

この「社会化の最終目標への道」において到達した結論は次の通りである。

「社会化の最終目的は平安である。平安であるためには人生における諸々の苦痛から開放されなければならない。諸苦痛から開放されるためには、その諸苦痛が発生してくる根源を知らなければならない。その諸苦痛の根源は無明にある。無明とは真実相に対する無明である。では、真実相とは何であるのか。真実相すなわち宇宙(万物)の真実相とは空である。宇宙(万物)は空であるとはどういうことであるのか。宇宙(万物)は空であるとは、宇宙(万物)は不生の素粒子(分割不能の無的主体・存在)^{2) 3) 4)}の単一体が縁起によって集合し、また離散することを繰り返して絶えることのない姿であるということである。ひとは、この宇宙(万物)の真実相を知ることによって「苦痛」から開放されて社会化の最終目標である「平安」に到達することができるのである。」(高澤 2009)

ところで、私たちは幼い頃から、意識的に、あるいは無意識的にさえも、社会生活において絶対的自由を求め、また絶対的平等を求めて生きているとってよいであろう。

しかし、絶対的自由とは何であるのか、ということを実際に忍耐強く学び考

え抜き、その結論に到達し得た人は少ないであろう。多くのひとは、現実の不自由・不平等に悩みながらも、日々を生きていくために、日常的な問題を常に優先することによって、絶対的自由とは何であるのか、というような人生上の非常に重要な問題であるにしても、解決するには非常に難解で、深い学識と強靱な思考力を必要とするであろう問題については、保留にして、それを学び考えることを中止しているのではないだろうか。また、絶対的平等とは何であるのか、ということについても上記と同様のことが言えるであろう。

さて、平安とは絶対的自由にして絶対的平等の境地のことである。したがって、平安に到達するためには絶対的自由にして絶対的平等の境地に到達しなければならない。では、どのようにすれば、絶対的自由にして絶対的平等の境地に到達することができるのであろうか。それを知るためには、まず第1に、社会化における絶対的自由とは何であるのか、また、社会化における絶対的平等とは何であるのか、ということについて知らなければならない。第2に、社会化における絶対的自由に到達するためにはどの道を歩いて行かなければならないのか、また、社会化における絶対的平等に到達するためにはどの道を歩いて行かなければならないのか、ということについて知らなければならない。そして第3に、絶対的自由と絶対的平等とは対立しないで両立するものであろうか、この対立するように思える両者が両立することが可能な地点はどこであるのか、ということについても知らなければならないと思う。

しかし、これらのことを同時に研究し、解明し、叙述することはできない。また、これらの難解な研究においては、理解しやすいものから始めるのが得策であろうと思う。

さて、絶対的自由と絶対的平等の両者を解明・理解するにおいては、絶対的自由よりも先に絶対的平等について解明するほうが理解しやすいであろうと思う。それで、まず、本稿においては絶対的平等への道を解明することにした。

2 相対的不平等の現実と是正について

本稿の目標は、社会化における絶対的平等への道を解明することである。この目標に向かって、この第2章においては、「相対的不平等の現実と是正について」研究したい。まず第1節では、「相対的不平等の現実について」研究する。第2節では、「相対的不平等の是正について」研究する。

2・1 相対的不平等の現実について

相対的不平等の現実はどのようなものであるのか。この命題を解明することが本節の目標である。

さて、ひとは誰でも生まれながらに相対的に不平等である。また、ひとは誰でも人間社会の中で生きている間ずっと死ぬまで相対的に不平等である。

人類には皮膚の色が異なる人種がいる。白色人種・黒色人種・黄色人種がいる。美女・醜女がいる。美女も無数の段階にランク付けされる。醜女もまた無数の段階にランク付けされる。記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。いわゆる頭の良い人と悪い人がある。頭の良い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。頭の悪い人の中でも、その程度において無数の段階にランク付けされる。高学歴の人と低学歴の人とがいる。高学歴の人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。低学歴の人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。富裕な家庭に生まれた人がある。貧乏な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。貧乏な家庭に生まれた人の中でも、その程度において多数の段階にランク付けされる。このように、ひとは人間社会に生まれたときから、死ぬまで絶えることなく相対的に不平等である。

2・2 相対的不平等の是正について

では、ひとは相対的不平等の是正（別言すれば、相対的平等）を求めているのであろうか。この命題を解明することが本節の目標である。

ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいる人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいる人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。これを極端に言えば、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の最下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が上記の各種の相対的不平等およびその他のすべての相対的不平等の最上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。

したがって、「ひとは相対的不平等の是正を求めているのであろうか。」という冒頭の命題の解明は次のようになるであろう。

ひとは、自分がすべての相対的不平等の中の一種類だけの相対的不平等であっても、その下位にいる場合には、自分より上位にいる、その一種類の相対的不平等を現象させているすべての人に対して相対的不平等の是正を求めるであろう。しかし、ひとは、自分がすべての相対的不平等の中の一種類だけの相対的不平等であっても、その上位にいる場合には、自分より下位にいる、その一種類の相対的不平等を現象させているすべての人に対して相対的不平等の是正を求めないであろう。

もう少し詳細に、また、結論的に言えば、次のようになるであろう。

(1) ひと（自我）は、一面においては、徹頭徹尾、相対的不平等の是正を求めている。

1) ひとは、ある相対的不平等の下位にいるときは、自分より上位に

いるひとに対して相対的不平等の是正を求めている。

- 2) すべての相対的不平等の最上位にいるひとは（そういうひとは現実には考えることができないが）数学的に言って、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の是正を求めていることになるのである。

(2) ひと（自我）は、他面においては、徹頭徹尾、相対的不平等を求めている。

- 1) ひと、ある相対的不平等の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不平等の是正を求めている。別言すれば、ひと、ある相対的不平等の上位にいるときは、自分より下位にいるひとに対して相対的不平等を求めているともいえる。
- 2) すべての相対的不平等の最下位にいるひとは（そういうひとは現実には考えることができないが）数学的に言って、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の是正を求めていることになる。別言すれば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等を求めているともいえるのである。

3 相対的不平等の結果と相対的平等について

この第3章においては、前第2章第1節および第2節の命題解明につづいて、「相対的不平等の結果と相対的平等について」研究したい。まず第1節では、「相対的不平等がもたらすもの」について研究する。第2節では、「相対的平等

の可能性について」研究する。

3・1 相対的不平等がもたらすもの

相対的不平等がもたらすものは何であるか。この命題を解明することが本節の目標である。

①相対的不平等の上位者は相対的不平等の是正を求めない。②相対的不平等の下位者は相対的不平等の是正を求める。このように仮定するならば、次の結果が得られる。①相対的不平等の上位者は相対的不平等の現実社会の是正を求めない。②相対的不平等の下位者は相対的不平等の現実社会の是正を求める。

ところで、既に触れたように、「すべての相対的不平等の最上位にいるひとは（そういうひとは現実には考えることができないが）数学的に言って、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不平等の最上位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の現実社会の是正を求めていることになるのである。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満の数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する不平不満を述べれば無数となるであろう。こうした相対的不平等を是正しようとする力と同程度の抑止力が作用することによって、相対的不平等がもたらす歴史的・社会的問題は容易には解決することができないであろう。

既に「第2章 相対的不平等の現実について」で述べた相対的不平等の種類との関係で述べるならば、次の歴史的・社会的問題を挙げることができる。

① 白人の黒人差別・蔑視の問題

人類には皮膚の色が異なる人種がいる。白色人種・黒色人種・黄色人種がい

る。この肌の色の相違から、あってはならない暴力的人種差別が人類史の過去において行われ、現在においても行われている。

② 美女の醜女差別・蔑視の問題

美女・醜女がいる。美女も無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視する。それゆえ、醜女意識のある人は、美女度を上げるために一生懸命に努力しているのである。

③ 記憶力の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題

記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、記憶力の悪い人は、知識をより多く記憶するために一生懸命に努力しているのである。

④ 頭の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題

いわゆる頭の良い人と悪い人がある。頭の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。頭の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、頭の良い人は、頭の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、頭の悪い人は、頭を良くするために知識をより多く記憶しようと一生懸命に努力しているのである。

⑤ 高学歴の人の低学歴の人に対する差別・蔑視の問題

高学歴の人と低学歴の人とがいる。高学歴の人の中でも、その程度において多数にランク付けられる。低学歴の人の中でも、その程度において多数にランク付けられる。そして、高学歴の人は、低学歴の人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは高学歴を身につけようと、少しでもレベルの高い大学への合格を目指して必死に努力しているのである。

⑥ 富裕な家庭に生まれた人の貧乏な家庭に生まれた人に対する差別・蔑視の問題

富裕な家庭に生まれた人がある。貧乏な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧乏な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕な家庭に生まれた人は、貧乏な家庭に生まれた人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは富裕な家庭に生まれた人のように、お金持ちになるように一生懸命に努力しているのである。

上記の、相対的不平等がもたらす結果の他にも非常に多くの問題がある。

しかし、こうした現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する無数の不平不満の膨大なエネルギーの爆発を抑制している力が他方にある。

既に触れたように、「すべての相対的不平等の最下位にいるひとは（そういうひとは現実には考えることができないが）数学的に言って、現在において生存している全人類の中の一人（単数）であると仮定する。この仮定に従えば、その最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の是正を求めていることになるのである。」ということになる。すると、相対的不平等の最下位者一人以外のすべての現存する人類は、多かれ少なかれ、何らかの相対的不平等の現実社会の是正を求めていることになるのである。

このように考えると、現実社会に対する人類の不平不満を抑止する数量は、膨大なものになるであろう。現存する数十億人の人間の相対的不平等の現実社会に対する不平不満を抑止する意見を述べれば無数となるであろう。

3・2 相対的平等の可能性について

さて、相対的平等は可能であるか。この命題を解明することが本節の目標である。

既に詳細については第2章第2節において述べたことであるが、まず第1に、相対的平等（相対的不平等の是正）を100%求めている人は、すべての相対

的不平等において最下位にある1人（単数）である。反対に、相対的平等（相対的不平等の是正）を100%求めている人は、すべての相対的不平等において最上位にある1人（単数）である。第3に、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているすべての人の上限を、先の第1に述べた、すべての相対的不平等において最下位にある1人（単数）として、その要求度を100%と仮定する。次に、相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているすべての人の下限を、先の第2に述べた、すべての相対的不平等において最上位にある1人（単数）として、その要求度を0%と仮定する。すると、すべての人間が自分の所属する社会において相対的平等（相対的不平等の是正）を求める程度（要求度）は、上記の最上位の1人を除けば、1%以上100%以下となる。別言すれば、現存する全人類の相対的平等（相対的不平等の是正）を求める程度（要求度）は、上記の最上位の1人を除けば、この範囲内にある。

これも、既に第3章において触れたように、ひとは、自分が各種の相対的不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないであろう。

つまり、ひとは、すべての相対的不平等の最上位者になりたいのである。そして、ひとは、すべての相対的不平等の最下位者には絶対になりたくないのである。

これを別言するならば、ひとは、誰でも、支配—服従（被支配）の人間社会の上下関係・権力関係の支配者になりたいのであって、服従者（被支配者）・奴隷には絶対になりたくないのである。

したがって、「相対的平等は可能であるか。」という本節の命題を解明すると、「相対的平等は不可能である。」という結論になる。

4 絶対的平等への道について

この第4章においては、前第3章第1節および第2節の命題解明につづいて、「絶対的平等への道について」研究したい。まず第1節では、「自我における絶対的不平等について」研究する。第2節では、「絶対的平等の可能性について」研究する。そして、第3節では、「絶対的平等の心境がもたらすもの」について研究する。

4・1 自我における絶対的不平等について

自我における絶対的不平等は如何にして可能であるか。この命題を解明することが本節の目標である。

人間は、個人対個人という視点から人類史上において誕生した全ての人間を見れば、いかなる二者においても絶対的に不平等である。

人類史上という時間上において全く同一の年・月・日・時・分・秒に誕生した人数は少ない。

その同一の年・月・日・時・分・秒に誕生した人々のなかで、同じ親から同時に誕生した一卵性複数生児の人数ははるかに少ない。

その同じ親から同時に誕生した一卵性複数生児の人々のなかで、一定の親から同時に誕生した一卵性複数生児の人数は一般的には多くても数名である。

その一定の親から同時に誕生した一卵性複数生児の人々のなかでも、一定の個人と同数の、また同内容の細胞を同時に所有している別の個人はいないと考えてよいであろう。

したがって、生物学的側面から人類史上において誕生した全ての人間を比較して見れば、この程度の常識的レベルにおいてさえも、いかなる二者も絶対的に不平等である。

誰もが知っているように、人類史上のどのような年・月・日・時・分・秒に

においても一定の個人と同様の個人は存在しないのである。

この絶対的不平等の身体に属する五官である眼・耳・鼻・舌・身は絶対的
不平等である。また、この五官に対応する五感である色・声・香・味・触も絶対
的不平等である。さらに、この五感から生じてくる意識とその記憶もまた絶対
的不平等である。そして、この意識とその記憶を自分のものとして統括する自
我也また絶対的
不平等である。

「自我における絶対的
不平等は如何にして可能であるか。」という命題の解明
は、要約すると以下
のようになる。

絶対的
不平等の身体から生じる五官および五感
は共に絶対的
不平等であり、その五感から生じる意識
とその記憶もまた絶対的
不平等である。そして、その意識
とその記憶を自分のものとして統括する自我
もまた絶対的
不平等である。

4・2 絶対的 平等の可能性について

先述の第2章第1節における命題の解明によれば、現実社会においてはあ
らゆる所に相対的
不平等がある。また、先の第3章第2節における命題の解明によれば、相
対的
平等の可能性は皆無である。さらに、先の第4章第1節における命題の解
明によれば、自我においては絶対的
不平等である。それゆえ、現在
において生存するすべての人類の自我
においても絶対的
不平等である。

では、絶対的
平等は如何にして可能であるのか。この命題を解明することが本節の目
標である。別言すれば、いかなる視点からみた場合において、人間にお
ける二者の絶対的
平等は可能であるのか。また、現在において生存するすべての人類の
絶対的
平等は可能であるのか。この難解な命題を解明することが本節の目標
である。また、それは本稿の最重要目標でもある。

既に、第2章第2節において述べたように、ひとは、社会の中で自分が置
かれている地位によって、相対的
平等（相対的
不平等の是正）を求めるときもあれば、相対的
平等（相対的
不平等の是正）を求めないときもある。ひとは、自

分が各種の不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めらるであろう。しかし、ひとは、自分が各種の不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないであろう。

したがって、こうした視点からみるならば、ひとは常に相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているわけではない。しかし、ひとは誰もがソクラテス、プラトン、アリストテレス、デカルト、カント、ショーペンハウアー、ニュートン、アインシュタイン等の学術的天才やレオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ラファエロ、ゴッホ、ピカソ等の芸術的天才やバッハ、モーツァルト、カラヤン等の音楽的天才等の天才に、いくら成りたいという強い欲求があっても、容易に成れるわけではない。各種の人間の才能の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類からその各種の天才の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が自分の才能より遥かに上位に、夜空を照らす導きの星のように煌く天才に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、無理に決まっているとあきらめて、不平不満の永い生涯を生きていかなければならない。

また、女性は誰もがクレオパトラ・楊貴妃・小野小町のような美貌・容姿端麗に恵まれているわけではない。各種の美貌・容姿端麗の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類の女性からその各種の天才の美貌・容姿端麗の頂点に立つ人数を引いた人数すなわちほぼ全人類の女性が自分の美貌・容姿端麗の才能より遥かに上位に、大空の太陽や夜空を照らす月のように煌く美貌・容姿端麗の人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、絶対に無理であるとあきらめて永い一生を生きぬいていかなければならない。

さらに、ひとは誰もが巨万の富者に成れるわけではない。巨万の富者となって金持の頂点に立てるのは、極めて少数のひとびとにすぎない。現在において生存する全人類からその巨万の富者の人数を引いた人数すなわちほぼ全人類が

自分の所有財産より遥かに上位に、一国の王のように君臨する人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めながらも、無理であるとあきらめて生涯を清く、しかし貧しく、生きていかなければならない。

したがって、こうした視点からみるならば、ひとは常に相対的平等（相対的不平等の是正）を求めているといえる。しかし、すべての人類が相対的平等に到達することは不可能である。天才と美貌・容姿端麗は個人が努力して到達できるものではない。巨万の富者にもまた努力してなれるものではない。

では、ほとんどすべてのひとが求める相対的平等に到達する別の道はないのであろうか。私は天才でなくてよかった。苦勞しなくて良いから。私は美貌・容姿端麗でなくてよかった。ひとに嫉妬されていやがらせをされないですむから。私は巨万の富者でなくてよかった。ひとに盗難されることを心配しないですむから。

こうした方法によって相対的平等を獲得したにしても無理がある。それは自分自身で納得できないものである。

では、この他の方法で相対的平等を獲得できないのであろうか。

さて、天才や美貌・容姿端麗や巨万の富者という特徴は個人の本性・本質ではない。それらは虚妄である。個人の本性でないもの（虚妄）における相対的不平等は、その是正を求めて努力する価値があるだろうか。それは、無価値であらう。

では、個人の本性とは何であるのか。仏教によれば、人間の本性は、物理学という素粒子（現在までに発見されている素粒子としては「真空のエネルギー」を構成する「ニュートリノ」）のような、分割不能で、しかし不生の無的主体・存在である。^{2) 3) 4)} また、人間の本来の姿は、前述の、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在の集合体である。

さて、人間の本性が、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるならば、すべての人間は相対的に平等である。また、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在はすべての人間において平

等であるから、この視点から見れば、すべての人間は絶対的に平等である。

では、社会化における絶対的平等はいかにして可能であるのか。既に触れたように、この命題を解明することが本節の目標である。

そこで、本節第1項においては、「人間的視点からみた絶対的平等について」研究する。第2項では、「生物的視点からみた絶対的平等について」研究する。そして、第3項では、「物質的視点からみた絶対的平等について」研究する。

4・2・1 人間的視点からみた絶対的平等について

社会化における人間的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

社会化における人間的視点からみた個人の絶対的平等は、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であることを知れば、すべての人間は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

4・2・2 生物的視点からみた絶対的平等について

生物的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

生物的視点からみた個人の絶対的平等は、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての生物の本来の姿と同様であるという

ことを知れば、すべての生物は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

4・2・3 物質的視点からみた絶対的平等について

物質的視点からみた個人の絶対的平等はいかにして可能であるのか。この命題を解明することが本項の目標である。

物質的視点からみた個人の絶対的平等は、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能でしかも不生の無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての物質の本来の姿と同様であるということを知ることによって可能となる。なぜならば、人間の本来の姿は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であり、それは宇宙のすべての物質の本来の姿と同様であるということを知れば、すべての物質は、素粒子のような、分割不能で、しかも不生の無的主体・存在であるという点において絶対的に平等であることを知るからである。

4・3 絶対的平等の心境がもたらすもの

絶対的平等の心境がもたらすものは何か。この命題を解明することが本節の目標である。

既に、第3章第1節の「相対的不平等がもたらすもの」で述べた歴史的・社会的問題との関係で述べるならば、それに対応する歴史的・社会的問題の解消を挙げることができる。

① 白人の黒人差別・蔑視の問題の解消

既に述べたように、人類には皮膚の色が異なる人種がいる。白色人種・黒色人種・黄色人種がいる。この肌の色の相違から、人類史上において、あつては

ならない暴力的人種差別が過去において行われ、現在においても行われている。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は白人の黒人差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

② 美女の醜女差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、美女・醜女がいる。美女も無数にランク付けられる。醜女もまた無数にランク付けられる。そして、美女度の上位に位置する人は、美女度の下位に位置する人に対して差別・蔑視する。それゆえ、醜女意識のある人は、美女度を上げるために一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は美女の醜女差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

③ 記憶力の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、記憶力の良い人と悪い人がある。記憶力の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。記憶力の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、記憶力の良い人は、記憶力の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、記憶力の悪い人は、知識をより多く記憶するために一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は記憶力の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

④ 頭の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、いわゆる頭の良い人と悪い人がある。頭の良い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。頭の悪い人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、頭の良い人は、頭の悪い人に対して差別・蔑視する。それゆえ、頭の悪い人は、頭を良くするために知識をより多く記憶しようと一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は頭の良い人の悪い人に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

⑤ 高学歴の人の低学歴の人に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、高学歴の人と低学歴の人がいる。高学歴の人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。低学歴の人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、高学歴の人は、低学歴の人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは高学歴を身につけようと、少しでもレベルの高い大学への合格を目指して必死に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は高学歴の人の低学歴の人に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

⑥ 富裕な家庭に生まれた人の貧乏な家庭に生まれた人に対する差別・蔑視の問題の解消

これも既に述べたように、富裕な家庭に生まれた人がいる。貧乏な家庭に生まれた人もいる。富裕な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。貧乏な家庭に生まれた人の中でも、その程度において無数にランク付けられる。そして、富裕な家庭に生まれた人は、貧乏な家庭に生まれた人に対して差別・蔑視する。それゆえ、ひとは富裕な家庭に生まれた人のように、お金持ちになるように一生懸命に努力しているのである。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境は富裕な家庭に生まれた人の貧乏な家庭に生まれた人に対する差別・蔑視の問題を根本的に解消する。

上記の、相対的不平等がもたらす結果の他にも非常に多くの問題がある。しかし、人間は無的主体において絶対的平等であるという心境はそれらの問題を根本的に解消する。

⑦ 永久平和への道

人間的相対的不平等の是正を求める力と人間的相対的不平等の維持・発展を求める力の衝突を原動力として、隣人間の紛争、集団間の闘争、国政の内乱そして国家間の国際的戦争が現象する。しかし、人間は無的主体において絶対的平等である、という心境はそれらの問題を根本的に解消する。永久平和への道は、この道の他にあるだろうか。

5 結 論

本稿の目標は、社会化における絶対的平等への道を解明することであった。この目標に向かって、まず、第2章第1節においては、「相対的不平等の現実について」研究した。ここでは、現実社会における相対的不平等の実態について明確にした。

次に、第2章第2節においては、「相対的不平等の是正について」研究した。ここでは、ひとは、自分が各種の相対的不平等の下位にいる場合には、自分より上位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めよう。しかし、ひとは、自分が各種の相対的不平等の上位にいる場合には、自分より下位にいるすべての人に対して相対的平等（相対的不平等の是正）を求めないであろう。以上のことを明確にした。

次に、第3章第1節においては、「相対的不平等がもたらすもの」について研究した。ここでは、相対的不平等がもたらす歴史的・社会的問題について明確にした。

次に、第3章第2節においては、「相対的平等の可能性について」研究した。ここでは、相対的平等の可能性がないことを明確にした。

次に、第4章第1節においては、「自我における絶対的不平等について」研究した。ここでは、自我はその根底から絶対的不平等であることを明確にした。

次に、第4章第2節においては、「絶対的平等の可能性について」研究した。ここでは、人間の無的主体・存在においてのみ絶対的平等が可能であることを明確にした。

最後に、第4章第3節においては、「絶対的平等の心境がもたらすもの」について研究した。ここでは、先の第3章第1節の「相対的不平等がもたらすもの」として生じてきた歴史的・社会的問題が、絶対的平等の心境によって、すべて解消されることを明確にした。

[注]

- 1) 「人間的不平等」について、ルソーは次のように述べている。「わたしは人類のなかに二種類の不平等を考える。その一つをわたしは自然的または肉体的不平等と呼んでいるが、それは自然によって定められ、年齢や健康や体力、それに精神あるいは魂の資質の差から成り立っているからである。もう一つは、一種の約束に左右され、人々の同意を得て定められ、すくなくとも正当化されているから、道徳的または政治的不平等と呼ぶことができる。後者はいくらかの人々が、他の人々に損害をかけることによって享受しているさまざまな特権、たとえば他の人よりも豊かだとか、尊敬されているとか、権力をもっているとか、さらには人々を自分に従わせるというような特権から成り立っている。」(ルソー著、小林訳、平岡責任編集 1966 : 118引用)

「人間的不平等」についての分析研究を進めるならば、極めて複雑な内容となるであろう。しかし、本稿の目標は「人間的不平等」の解明にあるのではなく、人間における絶対的平等の可能性について知ることにある。確かに、人間における絶対的平等の可能性について知りたいという欲求の原動力となっているのは、人間社会における絶対的・相対的不平等の現実である。しかしながら、そうであるからといって、本稿では人間社会における絶対的・相対的不平等の現実とその歴史的事実の分析・解明のために多くの時間を費したくはないのである。それで、現実社会における「人間的不平等」の分析・解明については、粗雑のままでも通過させていただき、「人間的不平等」の起原および歴史については、上記のルソーの名著を研究していただきたいと思う。

- 2) 「素粒子」「真空のエネルギー」および「ニュートリノ」等については、佐藤 1979 : 179—215、編集部・赤谷、協力：駒宮他7名 2005 : 28—55、リービット著、齊田訳 1976 : 5—19およびアイザック・アシモフ著、齊田訳 1977 : 262—264を参照してほしい。

3) 「分割不能の物質」について少し説明しておきたい。素粒子とは、分割不能の物質であるという。しかし、分割不能の物質というのは、一般に物質は無限に二分割が可能であるという原則に従うならば、存在することができない。この原則と矛盾するからである。分割可能でしかも分割不可能な物質というものは人間の論理能力の限界を超えているものであるから、それを理解することはできないし、それを想定することもできない。また、分割不能の物質というのは、空間と時間を持たない物質であるという原則に従うならば、それを人間の能力で想定することは不可能である。確かに、空間と時間を持たない物質が存在するのであるならば、その物質は分割不能である。しかし、それは人間の論理能力にとっては、「無」であるから、物質では有り得ない。したがって、分割不能の物質というものは、可想体にすぎないといえよう。

4) 「無的主体（存在）」について少し説明しておきたい。この「無的存在」と同様のことをあらかず仏教用語として、「空」「縁起」「無自性」「無常」「仏性」などがある。

① 「宇宙（万物）は空である」における「空」については、非常に多くの学説がある。中村 1994bには、次のように述べられている。

「〈空〉は大乗仏教の根本観念であるということは、だれでも知っている。では〈空〉とは何か、ということになると、なかなか答えが簡単には出て来ない。

〈空〉を説いた文献に関する研究は、毎年無数に多く刊行されている。しかし「〈空〉とは何か？」という端的な問題にたいしては、かならずしも答えが与えられていない。学者はとかく避けて通っているという傾きがある。

ここでは、空の理論を説いた代表的な哲学者であるナーガールジュナ（竜樹）の主著『中論』を主な手がかりとして、空の論理を解明しようと努めることにする。」（中村 1994b：はしがき i）

したがって、「空」の理論に関心のある人は、この『空の論理』およびその他の文献を参照してほしい。

- ② 「縁起」あるいは「十二縁起説」についての詳細は、中村 1994a : 440—528を参照してほしい。また、Olson, Carl, 2005 : 38—45も参照してほしい。
 - ③ 釈迦の「空」については、『般若心経』を参照してほしい。『般若心経』の解釈本はたくさんあるので、ここでは山田訳 1986および高神 1952を挙げておきたい。
 - ④ 六祖慧能の「本来無一物」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、久須本 2000 : 155—157を参照してほしい。
 - ⑤ 臨済の「無位の真人」もまた「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、臨済著，入矢訳 1989 : 20—21を参照してほしい。
 - ⑥ 盤珪の「不生」も「無的主体（存在）」と同様の仏教用語である。これについては、玉城 1994 : 68—71を参照してほしい。
- 5) 「社会化の原動力—体系の大要—」についての詳細は、高澤 1997を参照してほしい。
 - 6) 「社会化の発展」についての詳細は、高澤 1998を参照してほしい。
 - 7) 「社会化の最終目標」についての詳細は、高澤 2006を参照してほしい。
 - 8) 「社会化の最終目標への道」についての詳細は、高澤 2009を参照してほしい。

[文献]

Jean-Jacques Rousseau, 1754, *Le Discours sur l'origine et les fondements de l'inégalité parmi les hommes*. (=1966, 小林善彦訳『人間不平等起原論』, 平岡昇責任編集『世界の名著30 ルソー』中央公論社。所収。)

- 高澤勇, 1997, 「社会化の原動力—体系の大要—」『長野経済論集第34号』
長野経済短期大学学会
- 高澤勇, 1998, 「社会化の発展」『長野経済論集第35号』長野経済短期大
学学会
- 高澤勇, 2006, 「社会化の最終目標」『長野経済短期大学論叢第35号』長
野経済短期大学学術研究会
- 高澤勇, 2009, 「社会化の最終目標への道」『信州豊南短期大学紀要第26
号』信州豊南短期大学
- 佐藤文隆, 1979, 『宇宙の創成』紀伊國屋書店
- I. M. Levitt, 1974, *Beyond the Known Universe: From Dwarf Stars
to Quasars*, New York: The Viking Press (=1976 齊田博訳『未知
の宇宙』地人書館。)
- Isaac Asimov, 1975, *Eyes on the Universe: A History of the
Telescope*, Boston: Houghton Mifflin Company (=1977 齊田博訳
『宇宙の発見』地人書館)
- 編集部・赤谷拓和 協力: 駒宮幸男・岡野達雄・坂井建雄・湯本雅恵・家正
則・末次祐介・佐藤文隆・佐々木真人, 2005, 「真空は無? その正体
は?」『ニュートン (Newton)』(2005年8月号) ニュートンプレス
- 中村 元, 1994a, 『中村元選集〔決定版〕第16巻 原始仏教の思想Ⅱ
(原始仏教Ⅵ)』春秋社
- 中村 元, 1994b, 『中村元選集〔決定版〕第22巻 空の論理 (大乘仏
教Ⅲ)』春秋社
- Olson, Carl, 2005, “*Original Buddhist sources*” Rutgers University
Press
- 高神覚昇, 1952, 『般若心経講義』角川書店
- 山田無文訳, 1986, 『般若心経』禅文化研究所
- 柳澤桂子, 2004, 『生きて死ぬ智慧』小学館

- 久須本文雄著, 2000, 『新装版・禅語入門』大法輪閣「五五・本来無一物」
P. 155~P. 157
- 臨濟著, 入矢義高訳, 1989, 『臨濟録』岩波書店(岩波文庫)「上堂」P.
20, P. 21
- 玉城康四郎著, 1994, 『盤珪(法語・説法)』講談社「盤珪禅師法語(上・
網千の巻)」P. 68~P. 71

The Way to the Absolute Equality
in our Socialization

TAKASAWA, Isamu

The aim of this paper is to know the way to the absolute equality in our socialization . The conclusion of this study is the following. The essence of human is an elementary particle or the only one energy of vacuum or a neutrino. It is not a creature. It is a sort and a single one. By know this ,we can know the absolute equality in our socialization. Because, if the essence of human is an elementary particle or the only one energy of vacuum or a neutrino and it is not a creature and it is a sort and a single one, it is the same thing of all the essence of all living things in the universe, and it is the same thing of all the essence of all matters in the universe. Therefore , if we know this ,we know that all human and all living things and all matters are the absolute equality in the universe.